

東洋陶磁学会第 43 回大会 研究発表要旨

「備前焼—過去と未来を考える—」

平成 27 年 10 月 31 日・11 月 1 日・2 日

岡山県立美術館

< 基調講演 >

作陶 60 年を振り返る 伊勢崎 淳

< 研究発表 >

備前焼の編年 乗 岡 実

備前焼の流通 伊 藤 晃

備前焼類似製品を焼いた窯 井上靖子・赤井夕希子

桃山大窯の発掘 石 井 啓

近世都市江戸出土の備前焼 鈴木 裕子

備前焼の水指 下村 奈穂子

金重陶陽の業績とその評価 上 西 節 雄

日本伝統工芸展に見る備前焼 唐 澤 昌 宏

東 洋 陶 磁 学 会

共催：備前市・備前市教育委員会

作陶 60 年を振り返る

伊勢崎 淳

備前焼は現在の岡山県備前市伊部で約千年前から作られている。私も昭和 11 年に伊部に生まれ、以来よそに住んだことがない。父・陽山が備前焼をしていたことから、子どもの頃から焼き物になじんだ。友達とよく遊んだ山には西大窯跡(国史跡)があり、父と松茸を採りに、母親達と松葉刈りに山に入った折にも、陶片をよく拾った。まだ須恵器と同じ色をした小壺や碗の破片が散らばる窯、備前焼らしい茶色の焼けになった播り鉢ばかりの窯など、窯跡ごとに違いがあった。集めた陶片は石炭箱数杯分ほどにもなった。中学生になると土作りが役目になり、原土から水簸土や篩い土、選り土など用途に応じた土をこしらえた。できた土を足で踏んで練るのだが、冬に素足で踏むのは本当に冷たかった。登り窯の窯焚きも手伝ったが、つい居眠りしてしまって怒られたこともある。ろくろは蹴ろくろで覚えた。

岡山大学教育学部の特設美術科に進み、交友の中で現代美術の潮流に触れ、視野を広げることができた。卒業後は本格的に作陶生活へ入るが、戦後しばらくまでの備前焼は長い低迷期にあって、私が始めた頃には焼き物の家は 20 軒くらいしかなかった。私は父の下、兄・満と共に仕事を始めたが、すぐに室町時代の穴窯を復元し終えたばかりの父が急逝。この窯を兄と共に焚くのが最初の大仕事になった。明治以後、備前でも失われていた穴窯の焼成技法を再現するのにも、拾い集めた陶片や窯

道具から得られる情報が役に立ち、まことにうまく焼けた。それ以来、焼け色が明るく、表現の領域が非常に大きい穴窯の特長を生かそうとしてきた。

うちは父が置物や山口県下関市に立つ高杉晋作像などの陶彫を手掛け、兄は茶陶を深めようとしていた。次男坊の私は同じ傾向の仕事はしたくないと思い、29 歳で独立してからは一層、新しい表現を模索することになった。例えば、私の特色の一つである「黒」は、47 歳で網膜剥離を患い、手術後の暗闇の中で思いついた表現。発色を安定させるため、顔料を交ぜた土を吹き付ける手法だが、古備前の塗り土の技法を現代的にアレンジしたものだ。技法の基はあくまでも伝統の中に求めている。オブジェなどの大作にも積極的に取り組み、今年 4~6 月に岡山県立美術館で開催した特別展「有為自然—岡崎和郎、伊勢崎淳、中西夏之展」にも新作を出品した。しかしこれも、私の中では江戸時代から戦後すぐまでの備前焼を支えた置物の系譜の延長だと考えている。

備前焼は独特の土に恵まれて、中世六古窯の中でも無釉焼き締めを守り通してきた唯一の存在。個人作家だけで 400 人を超えるまでに発展したが、近年は景気低迷の影響を受けている。だが、土と火、風、水という自然の要素の中に本質を持つ備前焼にはまだ陶芸表現の新たな展開を切り開いていく力が残っていると思う。私もその伝統の中継ぎ役を務めていきたい。

備前焼の編年

乗岡 実

中世備前焼の考古学的編年は、間壁忠彦・葎子の

両氏による研究があり、近年は発展的な継承や細

分が試みられている。16世紀末以降の近世の編年は、消費地遺跡の出土例に加えて、備前南大窯周辺など窯跡出土資料の蓄積が進んで道筋が開けてきた。

備前焼は中近世をほぼ一貫して壺・甕・播鉢が量の主体を占め、編年もこれらの器種が主な対象であった。

備前焼は13世紀後半頃にスリメを入れた鉢を、全国に先駆けて成立させた。備前焼の播鉢は備前焼の独自性が強く、自身の運動原理で変遷した要素が強いとみられ、また大量に生産されて全国流通して、時代変化を最も捉えやすい器種である。中世から近世初頭にかけては口縁が肥大化して頑丈となるが、これは口縁下の鰐部を接点に製品を重ねて焼成することと不可分である。甕の口縁は14世紀中頃までは玉縁の形成過程、15世紀は玉縁の扁平化、16世紀は口縁帯の形成という道筋を辿る。壺の変遷は自身の運動原理で変化する要素もあるが、他産地の陶磁器の模倣要素も大きく複雑である。

基本三器一般形以外の器種に着目すると、15世紀中葉までには貿易陶磁写しとみられる四耳壺が、15世紀後葉には備前焼の独自性が強い器種として水屋甕が成立している。水指ないし建水形の鉢は

15世紀後半には成立していたとみられるが、16世紀中葉までのものは体部がバケツ形や「く」形で金属的な趣のある正回転体である。筒形の掛花生や徳利なども16世紀中葉までには成立している。

16世紀後葉になると、徳利は細身瓶形が主体となる。大皿も目立つが、この期から17世紀初頭にかけて、口縁端が外～上向きから内向きに変化する。体部内湾の浅鉢やその他水指・建水とみられる鉢、茶入形の小壺などもみられるが、やはり正回転体をベースにした比較的単調な器形である。返りのある灯明小皿も成立する。

17世紀初頭～前葉には前代に比べて飛躍的に器種が多様化する。例えば建水形の鉢でも極めて様々なものがある。広義の織部様式として捉えられる、奇抜な形の製品、非回転体あるいは作為的に一部を歪ませた製品も目立っている。

その後の江戸時代は無釉焼き締めを原則として堅持し、器種が多様化がさらに進む。他産地の施釉陶器の影響を受け、17世紀第2四半期初め頃に塗土が始まり、17世紀第4四半期頃に高台付の播鉢が登場する。徳利は17世紀末～18世紀初に人形徳利が、19世紀前半に角徳利が成立する。灯明皿も備前地域を越えて流通する代表器種であるが、時代とともに皿部の深さと返りが浅くなる。

備前焼の流通

伊藤 晃

全国の備前焼出土遺跡を検討し、その出土した遺跡は沖縄から北海道まで、約2千カ所におよび、その出土点数は各機種にわたり2万点を超えている(1)。さらに韓国での出土例も報告されている(2)。これらの備前焼がどのようにして各地へ運ばれたのかを沈船例・文献から検討を試みる。

沈船例としては、戦前の1940(昭和15)年、岡山県玉野市宇野沖の香川県直島北沖から引き揚げられた2百数十点の備前焼(3)をはじめ、1977(昭和52)年、香川県小豆島東沖水の子岩と呼ば

れている岩礁の海底から引き揚げられた10器種210点の備前焼の一群がある(4)。

また文献においては、1981(昭和56)年に発刊された『兵庫北関入船納帳』(5)には、文安2(1445)年の一年間に備前焼と考えられる積載品が20回にわたり、ツホ大小など1215点が兵庫北関を通過し、畿内に運ばれている様子が判る。さらに貞享3(1686)年、岡山大学『池田家文庫』『浦手形の事』(6)によれば、50トン前後の小型帆船によって3374点の備前焼が紀州へ運ばれよう

としたが、途中高砂沖で大風に遭い難船したことが明らかになっている。

今回はこれらの資料を検討しながら、伊部から瀬戸内海を通して西日本各地に海上輸送された備前焼の一面を見てみたい。

(1) 伊藤晃・乗岡実・石井啓・重根弘和・上西高登「中世陶器の物流—備前焼を中心に—」『日本考古学協会 2004 年度広島大会研究発表資料集』日本考古学協会 2004 年度広島大会実行委員会 2004 その後も資料は増え続けている。

(2) 片山まび「倭城出土の陶磁器に関する予察」『韓国の倭城と王辰倭乱』黒田恵一編 岩田書院 2004 (李

東柱「亀浦倭城支城部の性格と内容」『韓国城郭研究会創立学術大会』東亜大学校博物館 2002)

(3) 陶守三思郎『古陶磁銘品図録』第一編 昭和 17 (1942)

(4) 『海底の古備前』山陽新聞社 1978

(5) 林屋辰三郎編『兵庫北関入船納帳』中央公論美術出版 1981

(6) 伊藤 晃「貞享三 (1686) 年閏三月「浦手形の手」—播磨高砂沖難船の備前焼積荷—」備前歴史フォーラム『江戸時代の暮らしと備前焼』備前市歴史民俗資料館紀要 10 備前市教育委員会・備前市歴史民俗資料館 2008

備前焼類似製品を焼いた窯

井上靖子・赤井夕希子

西日本を中心として備前焼と酷似した陶片が各地で出土し、その地域での生産を示す窯跡もいくつか発見されてきた。こうした類似製品並びに窯跡は、すでに各産地と備前焼の研究者によって報告がなされてきたが、本発表では蓄積された研究に学びながら、幅広い備前焼類似製品生産の歴史から特に、16 世紀末から 17 世紀前半頃に操業したと推察される窯跡について取り上げる。

この時期の備前焼類似製品を焼いた窯跡は作見窯 (現石川県加賀市作見)・山本窯 (現兵庫県豊岡市山本)・安久窯 (現兵庫県舞鶴市安久)、窯跡が未発見のため産地が明らかとなっていないものに嶽山壺 (現山口県柳井市周辺) が挙げられる。

嶽山壺は報告されてきた資料のほとんどが甕や大型の壺であるが、前者三つの窯場ではすり鉢・甕・壺・鉢・徳利・窯道具が見つかっており、東 3 号窯跡・中央窯跡 (南大窯内)・西 2 号窯跡の一部 (全て現岡山県備前市伊部) の遺物と基本的な器種構成が一致し、器形も似ていることから同時代の資料と考えられている。加えて、備前でも出土例がほとんどない水指と推定される安久窯の陶片は、備前桃山茶陶の製作・流通の歴史、伝世品の生産地

呼称の真偽についても一石を投じるものである。

備前焼類似製品は備前焼と区別の付かないものまで含まれるが、厚みや肩部・口縁部の調整が異なる資料も見受けられる。例えば、嶽山壺では肩部の調整や口縁部径に標準的な備前焼と比べて違いを覚える個体が見られ、作見窯製品でも徳利の口縁部・大甕の厚みで同様の指摘がされている。このような定型からの逸脱は、その地域の土が持つ特性に起因すると考えられている。

築窯技術と窯焚き技術の習熟度、備前窯独特の窯道具の出土、成形手法などの視点から考察すれば、これらの窯場に備前陶工の関与があったと想定される。実際、高倉神社 (兵庫県舞鶴市) に奉納されている安久焼狛犬には、慶長 18 (1613) 年に備前陶工が納めたとへら書きされている。他方、山本窯・安久窯の製品には完成度に幅があるため、指導を受けた在地の陶工が製作に参加した可能性も指摘され、微量ながら丹波焼独特の「一本すり目」のすり鉢片が出土するなど、他窯業地の影響も見てとれる。

さらに、備前と近接する窯場・丹波でも同時代に、備前焼類似製品が出土する大部谷窯が存在する。

この窯では同時に丹波系も焼かれており、窯場としての技術蓄積を持っている分、他の窯とは違った器種展開をみせる。一方で、丹波陶工による備前の模倣ではなく、備前陶工による現地での生産を示唆する製品が焼かれていることは興味深い。

16 世紀末から 17 世紀前半における備前焼類似

窯の成立の背景は、備前地域内外で陶工集団が解体するような契機があったと受け取ることもできる。本発表は、陶工の移住・定住を基礎的分析項目と考えてはいるが、新たに製作者側、陶工の視点も取り入れて、各窯と資料の詳細について紹介する。

桃山大窯の発掘

石井 啓

茶陶を焼成したと考えられる大窯の発掘調査の様子を大会当日スライドで解説し、さらに大窯前後の窯構造の変化を考える。

伊部の地は北側に、標高 400m をこえる山塊「熊山」に連なる医王山 (301m)、不老山 (216m)、南側に榎原山 (210m)、東側は片上湾を望む。西側は備前焼の主要な生産品である播鉢の別称の由来となった香登である。香登は熊山の南面に広がる平野部である。西には吉井川が南下し、左岸を少し下ると一遍上人絵伝で知られる「福岡の市」の推定地がある。

北と南には標高 200-300m の山々、西側は海に開ける、約 1.5 km 四方の狭小の平野部、このような地勢に初めてつくられる窯は、今から約 900 年前、平野部と山稜が交差する山裾に築かれる。構造は極めて単純で、全長約 10m、幅約 2m の単室で、燃焼部と焼成部の区分はない。窯の床面勾配は地形に制約されるが、概ね 10 数度～20 数度である。代表的な窯は大明神窯、稻荷山窯で、他に 10 数基の分布が知られている。2011 年、医王山東麓でこの期の窯が備前市教育委員会によって初めて調査された。直径が約 15cm の灰白色の椀や小皿、甕、瓦などが出土し、中には経筒容器の蓋も確認された。

窯は基本的に単室が拡大する方向で推移するが、南北朝期には全長 14m、幅 1.6m の規模になる。備前焼の色調として多くの人々が認知している赤褐色の色合いが増え始めるのもこの頃である。

窯の構造が大きく変化するのは、天井部を支える柱が確認できる室町時代中頃である。代表的な窯は岡山県で行政発掘の嚆矢となる不老山東口窯である。1968 年に調査され、播鉢・壺など 1,600 箱以上に及ぶ陶片とともに、径 20cm、全長 20 cm 以上の柱状の構造物が確認されている。

江戸時代初には、全長 53.8m 最大幅 5.5m の巨大な窯が築かれる。床面の中央軸線上に径 50-60cm の土柱が規則的に 37 本並んでいる構造をもつ。伊部南大窯跡の中にある東側窯である。長大な窯だが、基本的には単室構造をもつ。焼成部と燃焼部は中央軸線と直交する方向に 3 本の土柱で区切られる。形状は円柱ではなく平面形がホームベース形をしている。床面勾配は三本の土柱を境に変わり、単室とはいえ機能を分化させている。この分化は不老山窯から既にあったと推定できる。燃焼部前面は焚口と呼ばれ、窯構造上も負荷がかかる部分である。窯廃棄後は崩壊、または改修が行われる。大窯での焼成は、期間 30 日以上、製品点数 3 万点以上という記録もある。準備にかかる多大なコストから、年 2 回程度の焼成が限度とも言われる。この巨大工場のような生産工程を解消するため、小規模な窯の併用、巨大な窯の焚口を強引に窯中央の焼成部に移動といった規模の縮小も行われる。

以上窯構造の変化を概観したが、桃山大窯も基本的にはこの江戸時代初めの大窯と同様である。詳細を当日スライドで説明する。

近世都市江戸出土の備前焼

鈴木裕子

近世幕藩体制の中心である城下町江戸は、30年前から現在まで約500箇所が発掘調査されている国内最大の近世の消費地遺跡でもある。その主要な遺物である陶磁器・土器からみれば、江戸は江戸市中と近郊で生産がまかなわれている土器・瓦を除くと、陶磁器は中部から北部九州で生産された製品が搬入されている。備前焼はそれらの陶磁器の産地別割合の中では、唐津を含む肥前と瀬戸美濃の2大主力生産地、それに続く志戸呂・丹波・堺・京焼よりさらに出土量は少なく、僅かに1、2%を占めるだけである。ではあるものの、備前焼は江戸市中では、近世を通じて需要のあった焼物である。この様相を捉えることは、生産地備前の姿も描き出すのも可能と考える。

各遺跡出土の備前焼を抽出し、器種毎の分類をすれば、最も量が多いのは突出して徳利である。これは舟徳利（通い徳利）と献上徳利・人形徳利に大別される。次に多いのは小壺（極小型。器高2～7cm位）で、3番目は播鉢・広口壺（蓋付きで小型）・煎餅壺等となる。器種・器形で分類すれば、数10

種類に及ぶ。特に、貯蔵・保管容器（徳利・壺甕類・その他の袋物）は、その容量により3、4サイズの分化がみられる。器種の年代的な変遷をみると、17世紀前葉～後半を中心に舟徳利・播鉢が出土し、17世紀末には献上徳利が出現し、この他小壺や油徳利・髪油壺・灯明皿等の新器種が現れる。19世紀前半には人形徳利・角徳利・広口壺や煎餅皿等が新しく生産され出す。煎餅皿は型押しの小皿であるが、器形・文様パターンが数多くあり、消費者の幅広い嗜好性に合わせている。新器種出現の画期は17世紀末と19世紀前半にあり、都市生活者の新たな需要に答えている近世備前焼の姿がみえてくる。また製品の成形方法も、17世紀はロクロ使用の紐作り成形、17世紀末にはロクロ水挽き成形の確立と型押し成形の出現、19世紀前半は板作り成形と新たな成形方法がみられ、その簡素化とスピードアップが図られている。

発表では、集成した資料を基本に、実測図や数量化等を提示しながら、近世都市江戸の備前焼の特徴を具体的に考えてみたい。

備前焼の水指

下村奈穂子

茶の湯で使用される備前焼のうち、水指は伝世品の数がとりわけ多いと思われる器種である。また、国の重要文化財に指定されている備前焼5点のうち、3点が水指であることも、水指が備前焼の代表器種であることを裏付けている。

本発表はその備前焼水指について、16～17世紀の茶会記を中心とする文献資料、および出土資料を中心に、さらに伝世品を用いて、考察を加えるも

のである。

最も早く文献資料にあらわれる備前焼の茶道具は、15世紀初頭の茶壺を除くと、水指と建水である。能役者である金春禅鳳の芸談を記した『禅鳳雑談』の永正13年(1516)11月5日の条により、遅くとも16世紀第1四半期には備前焼の水指や建水が侘び茶で使用されていたことが判明する。これは、同時に記載された伊勢物（瀬戸か）とともに、

和物の陶磁器では最も早い茶道具としての使用記録といえる。

一方、茶会記での備前焼水指の最初の使用例は、天文18年(1549)12月12日の棕宗理の会で、「水指 水こほし ひせん物」とある記述である。これ以降、天正年間(1573-92)前半までは、いずれも「備前水指」のような簡単な記述しか確認できない。ところが、天正年間後半以降、器形をあらわす言葉が伴うようになる。例えば、「芋頭」「占切」など南蛮物の写しと推測される水指や、共蓋が伴った水指である。

慶長年間(1596-1615)以降には、南蛮物や金属器などにはみられない「瓢箪」や「鳶口」があらわれるようになる。茶の湯の世界で、このような和物独自の新しい形が認められるようになったと推測される。

さらに、寛永年間(1624-44)以降には、「手桶」や「釣瓶」など木製品を写した形や、「菱」「六角」などの角形、さらに「毬」など新規の器形が続々とあらわれる。水指の造形が自由になった様子がうかがえる。

次に、出土資料をみていきたい。16世紀の初頭から確認できるのは、広島県北谷山城跡や島根県新宮谷遺跡から出土した一重口の口縁部に僅かに開口する桶形の形状を成すものである。その他には算盤球形、半球形も出土している。

慶長年間以降に位置付けられる堺環濠都市遺跡や京都三条の遺跡からは、口縁部が内側に窄まり、外側に凹帯や凸帯が巡らされた矢筈口筒形、および胴部が段状に膨らんだ重ね餅形が新たに出土する。また、この時期以降、胴部や口縁部などに篋目の装飾が確認できるようになる。

そして、寛永年間以降は、江戸遺跡より伊部手の水指が認められるようになる。

このように、16～17世紀の茶会記の記録、および出土資料を検討し、さらに伝世品と照合することで、備前焼水指の変遷を明らかにすることができる。その結果、これまで桃山時代とされてきた水指のうち、重要文化財の徳川美術館蔵の備前焼水指 銘青海は天正年間、重要文化財の北陸大学蔵の備前焼矢筈口耳付水指 銘破れ家は慶長年間に生産された可能性が高いとみることができる。

金重陶陽の業績とその評価

上 西 節 雄

たゆまざる研究や努力の結果、桃山風備前を復興した功績により、「備前焼中興の祖」とたたえられる金重陶陽は、来年1月には生誕120年を迎える。約20年前岡山県立美術館及び天満屋広島店において、特別展「金重陶陽；一生誕100年記念」を開催させていただいた担当者として、事前調査中や展覧会開催中・後に感じた陶陽の業績やその評価について発表したい。

陶陽の作風は、71年の生涯の間に大きく4つの変化を遂げる。まず尋常高等小学校卒業の15歳から34歳頃までの細工物の名手としての活躍。毛描きの細密さ、細かい部分の接着に砂糖を利用したことなど、陶陽の青年期の技巧力・早熟さにも注目

したい。しかし、手間のかかる割に、収入の少ない細工物に見切りをつけ、ロクロによる、土物・焼き締め備前に転向。これには、それまで備前に継承されていなかった、土づくり、作陶法、窯づくり、窯焚きなど、途絶えていた技法をすべて復元する苦難が待ち構えていた。土の良し悪しを食べて吟味、巧妙なまでの篋使い・耳つけ、気密室による窯変ねらい、夏冬による窯詰め法の変更などなど。また茶陶研究のため茶道家元への入門、コレクター訪問、からひね会参加。その結果、50歳代半ばまでに桃山風備前をほぼ完成させるのである。だが、このまま終わらないのが陶陽の偉さである。56歳の時、連れ立って来窯した北大路魯山人からはタタラ作

りによる食器、イサム＝ノグチからは前衛的造形の花器を学び、それも短期間に我が物とする。そして、昭和31年60歳の時、備前焼最初の重要無形文化財保持者（人間国宝）に。それから亡くなるまでの約10年間は、なるべく技巧を廃しての自由な作陶、「ヘタの良さ」・「稚拙の美」を求めての大らかな作風を目指す、青年期に身につけた完璧主義を抜け出すことができなかつたと私は感じる。

陶陽の偉大さを一言で言い表すことはできないが、まず作品の多様さ、変化の大きさであろう。これは彼の人並みはずれた行動力、交遊関係の広さによるものと考えられる。次に一つ一つの作品に対する気配り、思い入れの強さであろう。細工物からこの世界に入った陶陽ならではの耳つけ・ヘラ

使いの巧みさにより、誰もがオーラのようなものを感じ取ることができる。またロクロによる土物・焼き締めへの転向のところでも述べた、土・窯へのこだわりは、足で踏み、手で選り、3年以上寝かした粘土しか使わないという、他窯ではほとんど実施されていない土に対する真摯さ、何回も試作を試み、長男道明に対しても「おまえらが何回生まれ変わってもこの窯は作れないだろう」と言わしめた窯。さらに、電気ロクロ主流の時代にありながら、その音がきらいで、少し「がた」の来た手回しロクロに固執した作陶姿勢から生まれる気品や温かさも、陶陽作品の魅力とって差し支えないのではないだろうか。

日本伝統工芸展に見る備前焼

唐澤昌宏

備前やその周辺地域で活動する陶芸家たちを広く周知してきた公募展に、日本工芸会が主催する日本伝統工芸展がある。これまでに重要無形文化財「備前焼」の保持者をはじめ、岡山県や備前市の指定無形文化財の保持者など、主要な陶芸家が作品を出品し活躍の場としてきた。

その歴史を振り返ってみると、近・現代陶芸におけるいわゆる備前焼の評価、そして認知度、さらには将来に向けての存在意義が見えてくる。そこで本発表では、いまなお多くの陶芸家が発表の場とする日本伝統工芸展という一つの公募展を取り上げ、とくに無釉焼き締めを主体とする備前焼における個人作家的活動と表現の可能性について考えてみたい。

備前やその周辺地域では、無釉で焼き締めとい

う限られた技法での陶表現が今日でも根づいており、制作者はとくに素材や技法と向き合って、それらに強く根ざして作品を制作することで個性を求めてきた。それは世代に応じての土へのこだわり、造形へのこだわり、そして焼成へのこだわりに現れ、プロセスの見直しと解体、再構築により、制作者の意志が強く反映されてきた。例えば、その中の「土」を取り上げても、金重陶陽が見出した粘りのある「田土」からはじまり、ザックリとした「山土」、さらには「混淆土」というように、素材と個性、そして作品とを結びつけて、作家性と現代性を求めてきたのである。

プロセスの再見および再構築は、今日における備前焼を生み出す意義において、極めて重要な要素であり、未来へと繋ぐ道筋の一つといえる。

東洋陶磁学会：

〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-5-6 りそな九段ビル 5F KS フロア

TEL. /FAX. 03-3239-1277 <http://homepage3.nifty.com/toyotoji>
